

尹東柱と鄭芝溶

―二つの詩碑は国際主義の証―

宇治郷 毅

元国立国会図書館副館長
1968年大学院法学研究科
修士課程修了

はじめに

同志社大学今出川キャンパスのハリス理化学館の西側に、戦前同志社に学んだ韓国人留学生の清楚な詩碑が二つ並んで立っている。他大学でも創立者の肖像や学校を顕彰する記念碑は多く見かけるが、留学生の詩碑を建てたのは同志社が初めてであった。どちらも韓国で有名な詩人であり、韓国の文学史に大きな足跡を残した人物である。いま国内外からの見学者が絶えないという。この二つの詩碑建立は、学生一人ひとりを大事にした新島精神に通じ、直接には同志社の国際

主義の発露であり証であると言えよう。

尹東柱（ユン ドンジュ）

日本で最も愛される韓国詩人

尹東柱が1945年2月16日満27才の若さで福岡刑務所にて無念の死をとげてから今年で62年になる。また、今出川キャンパスに「同志社校友会コリアクラブ」の提案を受け、95年2月その記念碑が建てられてから早や12年が過ぎた。この間韓国ではこの詩人についておびただしい

研究論文、研究書が発表され、生前無名であった一青年はいまや最も有名な国民詩人となった。読む人の心を打つ暖かく清冽な叙情性と純潔な倫理性をひめた詩は、特に若者に愛されている。今まで尹東柱は抒情詩人、抵抗詩人、民族詩人、キリスト教詩人などいろいろの呼ばれ方をしてきた。これらの見方は、この詩人を一面から見た表現であり、詩人の本質はこれらの要素をすべて包摂したトータルな存在である。

日本ではこの詩人は80年代から知られ始め、今やかつての抵抗詩人金芝河をしるぐ人気を博している。全国各地に研究



延禧専門学校卒業時の尹東柱
(1941年12月)

会が生まれ、追悼の行事は絶えず、記念碑の建立も続いている。詩人の遺稿詩集『天と風と星と詩』の日本語訳は部分訳を含めるとすでに5種類が刊行された。彼の詩と生涯は国語教科書にも取り上げられ、テレビでも紹介された。かつてこのように注目され、日本人の心を深く捉えた韓国の詩人がいたであろうか。地味ではあるが静かなブームとよべる動きが各地に広がっている。

● 明東村から東京まで

尹東柱は、1917年12月に現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州（戦前の満州国^{クワン東}省和龍県^{フクリョン}）明東村で朝鮮からの開

拓民の子孫としてキリスト教家庭に生まれた。31年に明東小学校を卒業、中学は満州の龍井の恩真中学校と光明^{クワンミン}学園^{クワンオン}中学部、一時平壤の崇実^{ソンシム}中学校に学んだ。民族主義の強い風土で育ち、キリスト教信仰を深めた。17歳頃から詩作を始め、童謡に優れたものを残した。38年4月、日本統治下のソウルにあった延禧^{ヨンシ}専門^{ソン}学校文科に入学。在学時、神社参拝の強制、朝鮮語授業の廃止、朝鮮語新聞の廃刊、「創氏改名」制度の実施など植民地統治の過酷さを体験、それら一つ一つが彼の純真な心を苦しめた。しかし、この時期は良き師と多くの親友に恵まれ、勉学と詩作に打ち込めた彼の短い人生の中で最も幸せな時であった。死ぬ日まで天を仰ぎ、一点の恥なきことをで始まる彼の代表作「序詩」など今に残る名作の多くはこの時期に生まれた。41年12月の卒業記念に自薦の詩19編を取めた『天と風と星と詩』の刊行を企てるが、当時禁止されていたハングル（朝鮮語）詩集であったため実現しなかった。42年4月留学のためやむなく「平沼東柱」と日本式に改名し渡日、立教大学文学部英文科選科

に入学した。東京には4カ月滞在し、孤独の生活を垣間見せる『6畳部屋は他人の国』と詠った「たやすく書かれた詩」など五編の秀作を残し退学、京都に移った。

● 京都における尹東柱

尹東柱は42年10月1日同志社大学文学部文化学科英語英文学専攻に選科生として入学した。親友もいた美しい京都に魅力を感じ、キリスト教主義で自由な学風に惹かれたからであったと思われる。在学中の43年7月14日に、独立運動の嫌疑で下鴨警察署に逮捕されるが、この間の彼の生活や文筆活動などについては肝心の彼の日記、詩などの原稿、手紙類、書籍などをすべて押収され行方不明となっているため詳しいことはわからない。ただ若干の情報として、官憲側の取調べ記録と京都地裁での判決文、生前京都で会った親戚の尹永春^{ユンヨンソン}、金禎宇^{キムチンウ}の証言、大学の韓国人友人金一龍^{キムイルン}氏、同級生北島萬里子^{キタシママンリ}、森田ハル両氏等の回想などからその断片を知るしかない。それらによると従



同志社大学の同期生と宇治川でピクニックに興じる尹東柱（前列2人目）
1943年初夏（『星歌う詩人』から）

兄の京都帝大生宋夢奎（共に逮捕され獄死）ら少数の友人とは交際したが、通学以外はアパートの一室で孤独の中で読書と詩作に没頭していたようだ。そこから

写真が一枚残っている。43年春学友8人と宇治川にハイキングに行った時のもので、学生服、学帽姿で寂しい顔で中央に立っているものだ。在学中に逮捕され、

は決して行動派ではないが民族意識を強く持ち、良心に忠実に生きようとしていた姿が浮かんでくる。一日の鬱憤を洗い流すすべもなく、静かに目を閉じれば、心の中に流れる声、今思想がリングのように自然に熟れてきます（詩「帰って来て見る夜」）詩人は京都でどのような声を聞き、どのような思想を育ててきたのであろうか。

大学では、英文学史、英文学演習、英作文（滝山教授）、英作文（南石教授）、新聞学、フランス語の科目を受講した。成績はよかったが、静かで目立たない存在であったという。同志社時代の彼の様子を知らぬる

最後非業の死をとげたことを思うと一時でも学友と想いの時を持っていたことは少し救われる気がする。結局彼はハンダールで詩作し、数人の韓国人の学友と朝鮮の状況について議論し、現状を批判したことが治安維持法に違反するという理由で逮捕された。わずか10カ月の学校生活だった。京都地裁で「独立運動」罪で2年の刑を受け、福岡刑務所に送られ、正体不明の注射を打たれ祖国の解放を見ることなく獄死した。朝鮮の解放後48年1月に初めて遺稿詩集『天と風と星と詩』が同志社の先輩鄭芝溶らの努力で刊行された（序文は鄭芝溶の筆になる名文である）。また昨年彼が京都時代に住んでいた左京区田中高原町の武田アパート跡に京都造形芸術大学により記念碑が建てられた。

●三つの記念碑

尹東柱の詩碑は各地にあるが、次の三つが歴史的な意義をもっている。いずれも石碑の前面に「序詩」が刻まれている。第一は、68年にソウルの母校延世大（ヨセ）

内に「延世大学総学生会」が建てたもの。これは彼を直接知る関係者による追慕碑であると言える。第二は、忠清南道天安市の「独立記念館」の愛国詩・語録の庭に90年に建てられたもの。これは国家によって独立運動家と認められたことを意味し、民族主義の立場からの顕彰碑である。第三は、同志社大学のキャンパスのもの。これは留学生を国際交流の立場から重視し、国際主義の立場より建てた詩碑であると言えよう。同時に過去の誤りに対する反省と未来の友好関係創出への決意表明の意味ももっている。

（参考文献）
尹一柱編・伊吹郷訳『尹東柱全詩集 空と風と星と詩』（影書房、1994年）
日本基督教団出版局編刊『死ぬ日まで 天を仰いでーキリスト者詩人・尹東柱』（1995年）
尹東柱詩碑建立委員会編『星うたう詩人 尹東柱の詩と研究』（三五館、1997年）
上野潤編訳『天と風と星と詩』（詩画工房、1998年）

尹 東 柱 (ユン ドンジュ)

1917・12・30～1945・2・16

韓国の国民的詩人。現在の中国東北部（当時の満州閩島省）で生まれ、ソウルの延禧専門学校を経て、日本の立教大学、同志社大学に学ぶ。同志社には42年10月1日文学部文化学科の選科生として入学、翌年7月14日「治安維持法違反（独立運動）」の罪で逮捕され、45年福岡刑務所で獄死した。95年2月同志社大学今出川校地に詩碑が建立された。遺稿詩集に『天と風と星と詩』がある。詩集は各国語に翻訳され、『尹東柱文学賞』が設けられている。

鄭芝溶 (チョン ジョン)

蘇る抒情詩人

戦前の同志社の諸学校には朝鮮からの多くの留学生が学んだ。卒業生には優れた功績を残した人が多いが、詩人鄭芝溶もその一人である。彼は韓国では日本時代から近代詩の先駆者としての評価を得、詩壇の中心で活躍した。解放後の活躍もめざましかったが、不幸にして1950年ごろ亡くなった。政治的理由で一時的に忘れられた存在であったが、80年代か

ら再評価が起り、今では韓国文学史の高嶺に位置している。

日本でこの詩人が初めて翻訳紹介されたのは金素雲編『乳色の雲』（河出書房、40年、戦後『朝鮮詩集』に再録）であった。同志社の刊行物で鄭芝溶が初めて紹介されたのは、本誌の52号（74年9月）の拙文「同志社に学んだ三人の朝鮮人詩人」であった。この中で、吳相淳、鄭芝溶、尹東柱の紹介がなされた。これら同志社出身の三人の詩人が韓国文学史に占める位置は大変大きい。日本ではあまり知られてこなかった。この詩人が知られるようになったのは、京都新聞（98年11月30日）で「韓国の天才詩人京に再生」の記事がでてからで、あわせて有志による詩碑建立の動きが起った。



徽文高等普通学校英語教師時代の鄭芝溶。1930年（金澤東著『鄭芝溶研究』から）



大学今出川キャンパスに並んで建つ尹東柱（左側）と鄭芝溶（右側）の詩碑

京都に学んだ韓国人文人についての研究が発表された。それらが05年12月の同志社大学の鄭芝溶詩碑建立に結実した。

●生涯―同志社時代を中心に

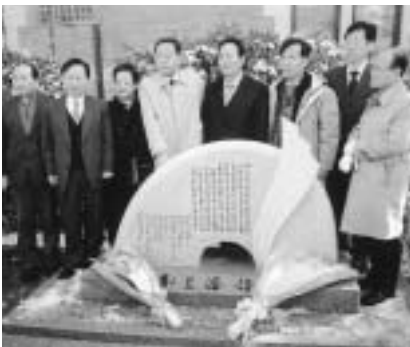
鄭芝溶は1902年5月忠清北道沃川郡沃川面（村）に生まれた。生家は幼少時没落し貧しかったが、地元の普通学校を終えると、ソウルの徽文高等普通学校に入学した。この時期より文才を発揮し、23年奨学金を得て同志社大学予科に入学した。鄭芝溶の生涯で同志社がもつ意味は大きい。それは彼の文学者としての基礎を作ったところであり、文壇にデビューを果たしたところであり、またキリスト教信仰を深めたところでもあったからである。26年に大学予科を卒業、文学部英文科で3年間学び、29年3月に卒業した。中退者が多かった当時の留学生の中では長期在学した数少ないケースであった。当時の大学は大正デモクラシーのもと学園には優れた教師も多く自由の気が漂っており、鄭芝溶も韓国人学友とともに青春を謳歌した。彼は18世紀の英

国詩人ウイリアム・ブレイクを卒業論文テーマに選び、勉学と詩作に励んだ。当時朝鮮の芸術に造詣の深かった柳宗悦同志社女専教授が大学の講師としてブレイクを講じており、鄭芝溶も受講した。勉学のかたわら日本の文芸雑誌「近代風景」等に日本語の詩を投稿し、北原白秋から注目された。また京都朝鮮留学生学友会雑誌「学潮」に「カフエ・フランス」「鴨川」などの珠玉のような詩を発表した。「同志社文学」にも詩「馬」（28年）を発表した。これらの詩や京都時代を回想した散文「鴨川上流」には京都の美しい自然に触発されて故国と故郷を思いやる抒情とともに異郷にとけこめない疎外感と民族的葛藤が表れている。彼は在学中熱心に教会に通い同志社教会で洗礼を受けたが、後年は敬虔なカトリック信者として生きた。

29年帰国後は、ソウルで英語教師のかたわら詩、散文、評論でめざましい活躍をし、30年代の詩壇の代表的存在となった。「詩文学」と「九人会」の同人として純粋文学の立場に立ち、当時流行のプロレタリア文学とは一線を画した。多く

の後才を詩壇に送り込み、後輩の育成に努めた功績も大きい。35年に『鄭芝溶詩集』、41年に『白鹿潭』を刊行するが、これらは韓国の現代詩を確立したものと評価を受けている。洗練された詩語の美しさとモダンリズム、叙情性、宗教性が渾然とした詩は文学界に大きな影響を与えた。尹東柱は鄭芝溶の詩集を愛読し、その詩に心酔している。45年の解放後、梨花女子専門学校（現梨花女子大学）教授や京郷新聞の主幹を勤めた。詩集『芝溶詩選』、散文集『文学読本』『散文』を刊行した。『散文』は自ら経営した出版社「同志社」から出版している。50年6月朝鮮戦争が起り、不幸にも直後北朝鮮に連行され行方不明となった（50年末死亡説が有力）。鄭芝溶は韓国では長く誤解を受け文学史上で黙殺されてきたが、80年代名誉回復され、現在「韓国現代詩の父」と呼ばれる。88年から毎年故郷の沃川巴で「鄭芝溶文学祝祭」が盛大に行われ、89年より韓国の7大文学賞の一つとして「鄭芝溶文学賞」が制定された。鄭芝溶は現在、尹東柱とならんで韓国の若者に最も人気のある詩人となっている。

●詩碑建立



日韓関係者による除幕式
（左から4人目が八田英二大学長）

2005年12月18日、大学今出川キャンパスで鄭芝溶詩碑除幕式が挙行された。「鴨川 十里の河原に 日は暮れて 日は暮れて…」で始まる京都時代の代表作「鴨川」の全文を日本語とハンダで刻んだ流麗な詩碑が生まれた。韓国の沃川郡と鄭芝溶記念事業会からの申し出であったが、一留学生の記念碑を建てることを英断した同志社の国際主義の発露であった。式辞で、八田英二学長が「韓

国の文学界に大きな影響を与えた二人の詩人が、いま心のふるさと同志社であり詩論を交わすことであろう」と述べた言葉が印象的であった。参列者は、日韓友好と交流への思いを新たにした。

（参考文献）

- 『鄭芝溶詩選』（花神社、2002年）
- 呉養鎬「芝溶文学散考」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』第5号、2000年）
- 斉藤真理子「わかりそうすがたのひとつ」（『言語文化』第17号、2000年）
- 水野直樹「朝鮮人留学生たちの京都」（同志社大学人文科学研究所『人文研ブックレット』16、2003年）

鄭芝溶

（チョン ジョン）
1902・5・15～正確な死亡年月不明
（50年頃か）

韓国の詩人。ソウルの徽文高等普通学校を経て、同志社大学の予科と英文科に6年間学ぶ。卒業後、日本統治下の朝鮮で詩、散文、評論などで活躍、詩壇の代表的存在となる。解放後は大学の教授としてまた文壇の重鎮として活躍したが、朝鮮戦争勃発直後北朝鮮に連行された。詩集『鄭芝溶詩集』、『白鹿潭』など多くの著述があり、韓国文学史に大きな足跡を残した。「韓国現代詩の父」と呼ばれる。2005年12月今出川校地の尹東柱詩碑の隣に鄭芝溶詩碑が建立された。